

難波西鶴と

海の道

【3】

森田 雅也

初回到西鶴の『好色一代男』の挿絵を挙げましたが、世之介が、女護が島へと向かう帆船は「好色丸」。船の種類は弁才船です。

江戸時代を通じて活躍した千石船もこの種類です。米を千石も積めば、元禄期なら1億円の商いです。そんな船を動かしているのはたった7、8人の船頭と水主でした。動力は風です。やりをつければ水主が増え、コストは高くなります。ですから、風任せの帆だけがいいのです。とほいものもの、風

と潮に恵まれれば早くて楽々とした航海になります。一つ違えば船は進まず、風向きによつては漂流・転覆・座礁の憂き目を見ます。仮に先回のように松前から江戸へ向かう船が、銚子沖などで偏西風のような西から東への強い風を憂な角度で帆に受ければ、太平洋に流され、そのまま黒潮にのってハワイまでも流されかねません。

その点、西回り航路であれば、打ち上げられても日本海沿岸。瀬戸内海に入ればもっと安全です。しかし、旅とほいものものは、海に限

油盗んだ老女の悲哀描く



西宮えびす(西宮市社家町)に残る「常夜灯」

らず陸においても、順風満帆とは限りませぬ。雨の日は昼でも暗く、深い霧の日もあれば、何かの事情から見知らぬ土地への途次で日が沈んでしまう場合もあります。

そういう旅人のトラブルに備えたのが、どんな寺や神社にもあった「常夜灯」です。江戸幕府は、これを命の道しるべとして、灯火

り、88歳にして食い詰めてしまいます。そこで油盗人。場所は河内一の宮「枚岡神社」。今も立派です。

相次ぐ被害に神官たちが張り込んでいると、乱れ髪のお老女が現れ、化け物と思った彼らは問答無用で首をはねてしまいます。老女としては無念の死です。以来、その首は口から火を噴きながら飛遊し、旅人にたたりますが、襲われる直前に「油さし」と言えは、不思議と命が助かります。

理由は「あがさし」を仏教のありがたい言葉「阿耨羅罽釁」と聞き間違えるといひので、笑いたいですが、さまざま老女の身となれば悲しい話ですね。

(関西学院大学文学部文学言語学教授)

海 道の守った常夜灯